

チュニジアのフランコフォニーとコードスイッチング

発表概要

本研究は我が国のフランス語学研究の中でも比較的新しい分野に属すると思われるフランコフォニー研究について取り扱うものであり、また実際の言語使用について北アフリカのチュニジア共和国をフィールドとして実態調査を行う事を目的としたものである。今回の発表は、フランコフォニーの概要を前半で示しつつ、後半でチュニジアの言語使用の実態を例を挙げながら示していくという形態で行った。以下順をおって簡略に報告することとする。

フランコフォニーという用語の意味の変遷について：19世紀にフランスの地理学者が初めに使用した用語であるが、それは当時の世界情勢を鑑みればフランスの植民地主義を後押しするような意味でのものであった。その後一旦忘れられるが、20世紀にはいり旧植民地・保護領が相次いで独立するに従って、新しい意味合いを獲得するに至る。旧植民地・保護領であった国々の為政者がとりわけフランコフォニー構想というものを共有し、それによってそれらの国々の連帯をはかり、また自国の発展・近代化・国際化に寄与することを目的とするようになった。1960年代から採られたそれら為政者によるイニシアティブによって、最終的にはフランコフォニー国際組織として結実し現在に至るが、その理念とするところは参加する国々の数多さからも垣間見えるように、決して一枚岩というわけではない。とりわけフランス語の推進と、現地語との共生という時に相反する方向性はいまだに懸案事項となる部分であると言えよう。

北アフリカのチュニジアに関しては、独立以前からすでに強力なアラビア語化の意思というものが一部の社会階層、独立運動の中に存在し、それは独立以後の様々な政策や法律の条文などにも見て取れるものである。また、教育プログラムの中でも近年フランス語による授業をアラビア語による授業に置き換えていく、という方向性も確認される。しかしながら同時に、それにより若者のフランス語能力の低下を招き、他方フランス語教育という方向性からはそれらを調査しまた改善しようとする公的な運動も見られるものである。

このような言語に関わる二つの方向性の中で実際にはどのような言語使用が見られるかについて、現地にて非常によく聴かれているラジオ放送でのコードスイッチング、コードミキシングに関して例を示し、分析を試みることを示した。今後の課題としてはさらなるサンプルの採集、ならびに分析手法の確立化などを挙げることになった。

質疑応答

以上の発表に対して会場からは幾つかの質問が寄せられた。以下に簡略にそれを記す。指定討論者の古田氏からは参考資料に関する質問、胡氏からは発表中に引用した CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）について質問を頂いた。また高橋氏からはフランコフォニーとはそもそも何か、チュニジアの国家について主権国家であるのか国民国家であるのか等の質問を受けた。参考資料に関しては出典を示し、グラフ等の数値について説明を加えた。CEFR に関してはヨーロッパにおける複数言語主義について述べながら説明を試みた。またフランコフォニーに関しては再度説明を試みたが、これに関しては本研究の要となる部分であり、発表においてもう少し明確にすべきであったと反省される。チュニジア国家については、専門外ということもあり、逆に教えを頂くような形になった。

最後に主指導の青木教授からは、研究全般に関してその価値、また分析手法に関してより一層深めねばならない由コメントを賜った。いずれにしても貴重な意見・コメントを頂けたと思う。IFERI からの支援により現地調査を恙無く遂行することができ、またその発表の機会を持てる事など、関係者各位にはあらためて感謝したい。